つてはいかぬ、羅馬をして昔の羅馬に還さなければならぬと云ふ此思想、所謂國家と云ふことを中心としたる考である。然し社會主義者の守り本尊として居る『萬國の勞働者團結せよ』と云ふ彼のマルクスの言つた言葉——此言葉に含まれて居る考、即ち國家と云ふものをなくして、勞働者の天下を實現せんと云ふ見方とは全然違ふ。即ち此の考だけが違ふのです。具體政策は皆軌を同じうして居ります。もつと言換へて見れば貧しき階級の救濟のみではない、貧しき階級の文化生活の昂上を圖ると云ふばかりではありませぬ。吾々は文化人として生活しなければならぬと云ふ中心觀念は、既に北歐羅巴に於てはあつたのです。此流れ——所謂北の社會主義思想と南のファシストの中心の具體政策とは、殆んど其軌を同じうして居るのです。唯々片方は國家を中心とするに對し、他方は勞働者のみを集めて團結して行かうと云ふのです。

そこで吾々は考へなければならぬ。『萬國の勞働者よ團結せよ』とマルクスが言つた。是はマルクスを通じて學問上に於ける所謂社會主義の説であるのである。

之れがマルクス、マルクスと騒がれるやうになつたが、もう今日はマルクスの所謂社會主義の思想と云ふものは單に學問上の問題ではない。是は既に思想を通過してしまつてもう立派な一の宗教である。皆さんや吾々が釋迦を信じ基督を信ずると同じにマルクス宗社會主義宗と云ふ宗教になつて居る。それには學問上缺點があると云うて論破しても、宗教として一般民衆に觸れて居る。宗教として考へて來て居る。今日はもう宗教化して居る。『萬國の勞働者よ團結せよ』と云ふ此のマルクスの言葉——此北方社會主義思想の流れ、此超國家的考へ、此見地から先づ吾々は振返つて我が日本はどうかと考へて見なければなりませぬ。

一三

諸君は日本を顧る前に歐羅巴を御覧なさい。歐羅巴に於ける此北方の超國家的の考の具體的現れである國際的勞働者の運動、其勞働者の爲め倫敦に開かれた國際的勞働者の示威運動にては、南方ファシストの思想に反對の氣勢を掲げたの

であります。所が倫敦に於て行はれた國際的勞働者の示威運動に現れた現況と云ふものは、さう大したものではなかつた。それは夥しく貧弱なるものであつたのです。又吾々は歴史を顧るときに於て、彼の歐洲大戰が始ると――超國家的に勞働者よ團結せよと唱へた彼等勞働者は、一度び國と國との間に戰爭が始ると、皆自分等の國に屬して戰に行つて、さうして彼等の仲間と共に鬪つた。

何は兎もあれさう云ふ觀點から吾々は日本の狀態を振返り見て、果して勞働者の文化昂上と云ふ流れ、さして國際的超國家的思想――歐羅巴の北方の一の流れ――之を觀點とした流れが强く流れて居る。即ち日本の勞働者も各國の勞働者と團結しやうと結びつきかけて居るだらうか、どうであるかと云ふ問題は是は大きな問題である。そこに於て吾々は吾々自ら體驗した事より考へて見なければいかぬ。此の結論を先に擧げるならば彼等歐羅巴人は日本人を自分等と同じ人間だとは毛頭思つて居りませぬ。歐羅巴人は吾々日本人を同じ地上に在る人間だとは思つて居ない。彼等は一體日本の汽車は誰が發明した。電話は一體誰が

考へたか、今日の日本の文明の源を生み出した者は何處の誰か、日本人が何が傑いのだ。みんな吾々の眞似ではないか、猿眞似ではないか、さうして歐洲が生んだ文化及文明と云ふものは世界に冠たるものであると云ふことを、彼等は己惚れて居るのであります。自分が傑いのである外の奴は皆駄目なんだ、吾々こそ世界に冠たる者であると己惚れてしまつて居る。

成程今日の文明と云ふものは彼等が生んだと云ふ意味に於ては之を否定するものではないが、歐洲文明は吾々が生んだ、吾々は世界に於て一番傑いんだと己惚れてしまつて居る。さうして吾々東洋に於ける世界に誇るに足る東洋の精神文化――印度の佛教さへも、是さへも彼等は否定し去らんとして居るのである。吾々の生んだ文化が傑いのだと云ふ文化の自己暗示感性に罹つたやうな、催眠術に罹つたやうなものである。自分が傑いんだ、是だけならまだ宜いのですが世界に於て神に認められた人間は白い人間だけであつて、黑い人間とか黄色い人間なんと云ふものは神から認められた人間ちやないんだ、成程顏こそ人の貌をして居る

が神は之を人間として取扱はれぬ、獸として居るのだと云ふ人種差別から來る彼等の偏見が――吾々は之を偏見と斯う言ひます。所謂人種觀から來る所の彼等の優越性――白い者ばかり傑いと考へさせ、さうして印度及吾々東洋に於ける文化所謂精神上の問題なんかは彼等は少しも顧ないのです。白いのが傑いのだ黄色と黑ん坊は駄目なんだ。一體黄色い日本人なんかは生意氣だ。なに青島なぞかを奴等はやつつけたけれどもあれなどは猿の人眞似で何でもない。さう云ふ人種差別から來る觀念、まだ黄色い奴に對しては大したことはないんですが、黑ん坊に對しては實にひどい。例へば男の黑ん坊が白ん坊の女を一寸でも口說いたなんかと云ふと、其晩其黑ん坊を道の眞中に引張り出して慘らしい目に會はしてとう〳〵殺してしまふのです。色が黑からうが白からうが青年男女の間に萠す戀心には何等變りはない。今日は戀の神聖を尊ぶと云ふのに黑ん坊だからどう、白人だからどうと云ふことはある可き筈がない。然るに黑ん坊が戀をしたからと云つて之を足げにして殺してしまふ。

一四

どうです彼等は自分こそ最高文化の傑いものだと云ふ己惚と、人種的に自分等が傑いんだと云ふ此の二つのものに加へて――是だけならばまだ宜いのですが、もう一つある。それは問題がなければ宜しいが何か問題が起ると宗教と云ふものが出て來る。宗教觀念の差別、もつと言換えて見れば彼等は基督教信者である。東洋の吾々は佛教信者である。土耳古からあの邊の所は回々教信者である。人間の生活に於ては宗教を要求する所謂宗教の生活と云ふことは皆んな同じものである。宗教の中心の精神から言へば同じものです。所謂絕對依存の念と云ふ此の感じが之れを對象としての基督に見出だし、印度及び吾々日本人には釋迦と云ふ對象に赴く。お釋迦樣に依存することに於て吾々は宗教上の生活をする。又アラビヤ邊に於てはマホメットを對象にしてそこに宗教の滿足を得る。卽ち宗教に依存することに於ては同じである。片方は基督の、片方はマホメットの人

格を中心とする宗教、片方は釋迦を通じて佛にかようのである。然るに彼等は自分等と違つた宗教を信ずる事は神様が許されないから征伐すべし。世界の中から其影を葬り去つてしまへと云ふので彼の十字軍として歴史の上に於て現れた――此の十字軍の連中と云ふものが押寄せて來た。さうして自分等の細君等は男に取られてはいかぬと云ふので貞操帶と云ふものを箝めさせて引縛りさうして戰爭に出て居る。隨分ひどいことをしたものです。所が其の帶が今日巴里の博物館に陳列されて居るのですからコッケイです。鍵で引縛つて居る。是では間男をしやうと思つても迚も出來ない。

此樣に彼等は異教徒に對しては奴等は駄目だ奴等を亡ぼすべしと云ふ。問題がないとなんでもないが、何か事が起ると直ぐ之が出て來る。例へば私などが獨逸にやつて行くとお前は宗教は何かと聽く。昔の吾々の先輩は佛教徒であると云ふことは中々言はなかつたものであるそうだ。今日の日本とは其れは大分違つて居つたのです。併し日清日露の戰に屍を野に曝して向ふをやつつけてから今

日の日本人は昔の日本人とは少し違ふ。が併し君等は軍をして奴等をやつつけたと言ふけれども、お前等が何と言はふが吾々の文明の利器を使つたお蔭ではないか。否なお前等は日本人に負けたからさう云ふことを言ふのだらうが、實際日本人が軍に強いから勝つたのだ、今の戰爭と云ふものは唯機械だけの戰爭ではない。頭腦と機械の兩方に依る戰爭ではないか、もつと言換えて見れば肉彈だけではいけないことは勿論、文明の利器を以て戰爭すると云ふことが、今日の戰爭であると云ふことを前提とするならば、君等は此頭腦に於て負けたのではないか、お前等は文明々々と云ふが日本人の文明にずつと劣るではないかと啖呵を切る。さうすると彼等はそれは日本の兵隊は頭數が多いが獨逸の兵隊は數が少いではないかと言ふ。何れにせよ彼等は宗教上の考と云ふものに非常な相違がある。伯林なんかの警察に行つてお前は宗教は何か、勿論佛教である――佛教の國から來たのだ、もう今日に於ては獨逸に於ても知識階級などは哲學上より見て基督教より佛教が深いと云ふて今更の如く騷いでゐる。吾々は佛教は世界に誇る精神

文明で印度から來たのだ。彼のショーペンハウエルは一體何から來た哲學か。印度から來た宗教の引繼ぎではないか。眞逆かかういは亂暴に私が啖呵を切つた譯ではありませぬが（笑聲）まあ内容は斯うなんである。

一五

それが現に角十字軍以來の墮性で問題のないときはなんでもありませぬが、何か問題が起ると此宗教が出て來る。其が彼の土耳古に對する傳統的外交政策に現れてゐる。一體土耳古は亞細亞人種で回々教徒である。所が回々教徒は中々傑い。日本人が外國に行くには洋服などを着て行つてまあ巴里ジャン化せんとする意識が中々强い。けれども彼等回々教徒は中々傑い。彼等は必ず回々教徒の現れである土耳古帽を被つて何處に行つても放さない。私が見たのですがフランスの南海岸にフランス軍艦が上陸した。さうして彼等乘組兵士が海岸にずらりと整列して居るのを見た。すると其列の中にポツリ〳〵と赤の這入つた士

耳古帽が見える。軍人なら軍人らしく一齋に列したら宜からうに、フランス兵である土耳古人が土耳古帽を被つて居る。さうして自分は回々教徒の軍人であると云ふことを示して居る。何と言つたつて其は取るものではありませぬ。世界中何處に行つたつて取りませぬ。兵隊の回々教が是ばかりは取れぬ——何時でも斯う云ふのですから仕方がありませぬ。而も歐洲大戰に於て歐羅巴人は餘り强くないと云ふ現狀を暴露した。それは土耳古の兵隊も黑ン坊のアフリカの連中も皆一緒に闘つて來た譯ですからさうして白人なんかと云ふものはさう大して强いとか傑いとか云ふものでないと云ふ現實を暴露してしまつた。其の結果はモロッコ、アルゼリヤあの邊は今獨立しやうと言つて内亂を起して居る。

さうして彼等は戰爭でも起つて來ると奴等は回々教徒であるから奴等は駄目だ、さうしてそこに多くの基督教の坊さんが十字架を立てて行き異强徒を蹴飛ばして行くのである。是は今日、日本が社會を騷がせないからだが佛教徒が何かやると彼等は佛教信者だから甚だ怪しからぬ斯う云ふ風に言ふことにならう。

兎に角歐羅巴人は自分の文明が一番傑いと云ふ己惚れ、白人種だから他の人種より傑いと云ふ己惚れ、又基督教を奉じてゐる歐羅巴人は他の宗教信者よりも傑いと云ふ己惚れ、斯ふ己惚れも三つ四つと重つて來るともう巣鴨行に近い。(笑聲)もう完全に氣狂ひです。ものを言つたつて分らないのです。

一六

そこで問題は『萬國の勞働者よ團結せよ』と云ふことは之が民衆文化の流れで、一般民衆の文化を昂上すると云ふのであるが、吾々日本人は一つ能く考へなければならぬ。あの連中は先づ三つの己惚に罹つて居る。實際こういう考を以て見る眼に於ては物事を決して正當に見て居りませぬ。何分氣狂ひでありますから奴等はまだ〳〵日本などは下に見て居る。之を難しい言葉で言へば彼等は我れの人格を認めない。黄色い日本人のヂャップがなんだ――歐洲やアメリカ邊りではヂャップと言ふ。それでアメリカなんと云ふ國は私は嫌ひだから行かぬつもりでしたが、丁度あの排日問題で喧しい時でしたから一つ見て置かなければならぬと思つたから行きましたが、全くアメリカ人なんかはしやうのない連中です。あんな所に行くよりも巴里の別嬪でも相手にして踊つて居つた方が餘つ程宜い(笑聲)。所があの排日問題で是はどうしても一つ見て歸らなければならぬと考へので行きました。

何しろアメリカなんと云ふ國は金がものを言ふ國である。今度自分が出發する時は一つ船の一等室の第一號の部屋を買つて日本人一人どんなものだと奴等に見せてやらうと思つて居つた。さうして愈々船が出帆すると一等室の第一號の部屋に日本人の私一人陣取つて、はは！　と悠揚なるものですね。(笑聲)さうして船に乘つて居る。此船中では新聞が出ます。先づ翌朝食卓に就くともう卓子の前に新聞が出て居る。其中にヂャップが倫敦の都市計畫を借りに來たと云ふことが書いてある。ヂャップとは怪しからぬ。自分一個人としてならばまだ我慢もしようが日本人を侮辱したとあつては國辱問題である。背後に國家を背負

つて居る吾々を侮辱するのは國家を侮辱するものであると云ふので非常に強くなつて居ります。やつが愚図々々言ふと共儘にはして置かぬと云ふので、直ぐ船長に交渉した。此新聞を見て呉れ、苟も吾々は帝國の臣民――日本人だヂャップとはなんだ、と云ふと何に是は惡い意味ではないと言ふ。そこで私は駈け出しの外國に出て來たものならさう思ふか知らぬが、吾々は外國の生活をしてから二年以上にもなつて居る。ヂャップと云ふことがなんであるか誤魔化さうとしてもそれは駄目だ。若し今後二度とヂャップなんと書くならもうどうするか分らぬと云つてやつた譯なんです。何しろ日本人は柔道と撃劍を知つて居ると云ふので是が彼等には非常に怖い。斯う云ふと自分が何か柔道でもやりさうですが其實良くは出來ぬ。(笑聲) さう云ふ譯か今まで米國歐羅巴と一人で歩いたけれども一遍もまだやられたことはない。私は柔道なんどはよく知らぬ、初段なんかも持つて居りませぬ。併し體はさう小さくない方ですからが柔道をやつたら耐つたものではない。

(笑聲)。日本人が最後の決心をするとひどいことをやると云ふことを知つて居りますから滅多に向ふから手出をしませぬ。あちらの決鬪はへな〱刀でひゆつ〱とかすると、それでもう傷を受ける。それで勇士だと云ふ。之があちらの勝負なんださうです。ほんの薄つぺらな劍でひゆつと傷が附くと直ぐ止めさせるさうです。さうして戀が中心で女の學生なんかを奪ひ合ひをやるのださうです。(笑聲) それが決鬪で名前だけは强さうですね。先輩の話であるが一人の日本人が相手の男に決鬪をやらうと申込まれました。宜しいと云ふので取つて置きの日本刀を以て決鬪をやることになつた。愈々と云ふと一寸待つて呉れ國の母に手紙を書くから……一體どうしたのだ手紙などを書くなどと云ふことは……日本人が一たび刀を抜いて相手と斬合ふときには彼の首級を我れ刎ねるか、我れ彼に殺されるかと云ふ鬪ひはたつた一つの命の取りやりだ、自分は母に最後の暇乞を書くのだと云うて日本刀を抜いて――何しろ秋水も滴らんとするやうな日本刀です(笑聲)。先祖傳來の日本刀である、さあ堂々と勝負をしやう。所が是は勝

負どころの話ではない。まあ一寸待つて與れと云ふ譯で——全く奴も驚いたと見えて是れ以來日本人には決して決鬪は申込まぬ。もう日本人に決鬪を申込んではいかぬと云ふ譯です。(笑聲)

併し彼等は日本人を生意氣な猿眞似をすると思つて居る。さうして吾々の人格を信じない。斯う云ふ際に於て吾々が彼等と手を握る。其握る、所の彼等の手は一體何であるか、彼等は堂々と手を握る際に於ても日本人と云ふものは自分等よりずつと下の方にある者と思つて居るのであります。そこで吾々が彼等と手を握る前に先づ考へなければならぬことは——强者が弱者と手を握る態度を以て、彼等が强者として弱者に對する考を以てすると云ふことだ。

諸君は吾々を弱者として、もつと言換えれば我等の國を亡ぼさんとする所の彼等、吾等の人格を認めない所の彼等に足蹴にされても吾等は彼等と手を握つて行くかどうか。誰だつて足蹴にされる弱者としての覺悟の上で彼等と手を握ることは好まない。成程民衆の文化の昂上や、勞働者の生活を引上げると云ふ理想に

於ては無論贊成する所である。此意味に於ては異議はない、併ながら『萬國の勞働者よ團結せよ』と云ふ其手を握る前に、吾々は先づ日本と云ふものをもつと〳〵强いものにしなければならぬ。日本人と云ふものを世界にもつと强く認められるまでは吾々は彼等と手を握ることは出來ませぬ。

一七

諸君吾々は對岸にアメリカを控えて居ります。彼等は三つの己惚れから來た氣狂の固りであります。それにもう一つの己惚れ、金を持つて居る奴は傑いと云ふ己惚れです。而も歐洲文明は一の競爭文明です。歐洲の原には幾多の國家を成して居る。其處には片方の國が弱いと直に之を併吞してしまふ。それは競爭の文明である。彼は相手に缺陷があれば之を蹴つ散らさうと云ふのである。

顧て吾々の鄕土はどうであるか。我國施政の中心觀念は、世界の文明、世界の文化の爲には我國民は終始一貫盡すべきである。此意味に於きましてはマルクス

の言と共精神に於ては軌を同じうして居るのであります。にも拘らず吾々は彼の歴史上に於て見る羅馬とカルタゴの地中海に於ける距離よりも、今日の日本とアメリカは遙に遙に近くなつて居る。而も彼等は三つの已惚れにもう一つの金の已惚れを加へ、而も文化及文明の中心と誇り相手に若し缺陥あれば之を蹴散らさんとして居ります。

然らば吾々は如何に處すべきか。吾々は世界人類の文化昂上の理想に向つて飽くまで之が追求をしなければならぬが、一歩退いて考ふれば現時の我日本は最も眞劍に文化主義に精錬されたる意識のもとに强國と云ふこと――此事を寸時も忘れてはならないのであります。(拍手)

四　國民性批判

一

此間一寸三越に買物に行つた。相にく私の求むる物がないので、それでは白木屋へと思ふて三越を出でブラ〳〵あの呉服橋を渡らんとした際とくに目についたのは、交通整理をしてゐる巡査である。もつと端的に云へば、巡査それ自身でなく、其の整理に急しき手である。否なその指である。否な〳〵手の動搖と其の指の震動である。あの急しそふな絶へ間ない手の動搖と、はた其の指の瞬間的震動數の夥びたゞしい事である。もしあの手の動搖數指の震動數を學的に統計にとつたら一分間十數回との計算が出でくるかも知れない。あの職務に熟心な巡査に對して、私は感謝の念を以つて眺めゐる際フンと思はず吹き出した。其の瞬間

感謝の念は思はず滑稽さに變じたのである。

感謝より滑稽へとは何たる對照であらうぞ。而かもその變化に際し其間一瞬間さへも出でないのである。

それは外でもない。フト英國の交通整理の巡査を思ひ出したからである。感謝の念の際はあの雜踏の中に立つて整理に急しき巡査に對する情であつて、滑稽にもフンと吹き出した時は英國巡査を思出しての其の對照に於いである。

あの英國の巡査は急しい往來のはげしきロンドン市街に停つて悠々と只手を上げ手を下す丈けで、而かも指の震動なぞ見る樣なことなく右に左に電車と云はず、自動車と云はず、右往左往の往來の人を整理するあざやかさは實に見上げたものである。落ついた巡査の態度、其のユツクリした手の上げ下げは、これを見る者どんな雜踏の市街に於てもむしろ依賴をも含んだ安心を與るものである。況んや一分間十數回と數へ得る指の震動なぞに於ては見んと欲するも見得ざる所である。今思ひ出してさへあの丈の高い、ユツクリしたあの巡査は氣持のよい落付

きを與へる。巡査で思ひ出したが嘗つて英國の博覽會を郊外に見てロンドンへの最終の汽車に間に合つて停車場へ着いたのは、夜も還ひ十二時近くであつた。急いで停車場を出で道路を横らうとしたが、フト右手を見ると一臺の自動車は人無きを幸ひに非常な速力で進行して來る。これは危ぶないと少時停みゐると一隊の七人許りの警官は今や四十五度の角度で斜に此の道を横りつゝ進行してゐる。アヽ危いと思ふてゐると自動車の近く約三間許りのところで突然先頭の巡査は懐中電燈を出した。これを見て自動車はピタリと止まつた。其間巡査の歩調は終始何等止るなきは勿論、同一歩調で不關焉の態度で進行してゐるのを見た。此の例の如きも如何に沈重に悠々たる態度であるかをのぞき得よう。

この英國巡査は交通整理と我國の巡査のその整理態度を比較して見て私は思はず國民性の一部的表現を見た樣な感じがした。

二

元來大都市は神經質文明の發生地であることは、敢て社會學者の說によらずとも少しく省察さる人は知つてゐることである。大都市神經質の前提から考へる時、その當然の結論として都市の大小は神經質の大小に正比例する譯けである。こう考へて見て東京とロンドンを比較して見ると其の大さに於てロンドンは東京より遙か大なることは私が述べる迄もない。從つて其の一部表現たる巡査に於て東京とロンドンを比較した際神經質の立場から見れは、ロンドン巡査の整理の際に於て其の手の動搖や指の震動に於て一分間に數回を數る東京の巡査よりもロンドンの巡査の方は其の手に於て其の指に於て一分間數十回の動搖と其の震動を數へなければならぬ譯けである。然るに事實は之れと全く反對な現象を呈する事實に直面するに於ては我々は深く考へなければならぬ。即ち兩巡査の此の表れは、即ち兩國民性の一部的表現ではないかと。端的に云へば我國民性に於てコセツク點を多分に有してゐるではないだらうかと。

これにつけ思ひ起したことであるが、夕ぐれロンドン市の眞中に横るハイド公

園を散步した際のことである。朝には貴族階級の乘馬での散步場たる此の公園には晝には中等階級の遊步場となり、夕方よりは下級階級の慰安場と變るのである。下級階級の慰安物たる此の公園の夕暮は他國で見られざる光景を呈するのである。時間により勞働する多くの勞働者即ち女中といはず下男と云はず、日傭勞働者といはず、はた兵隊といはず、夕れよりの公園をパラダイスとしてつどい來るのである。東より西より、はた南より北より、公園を目ざして來るので各々親しき友や戀しき友の手をとつて而かもなるべく氣持ちよき草叢へと、一對の男女は戀を語ふにや嬉々として離れまじと結べる腕には見る者さへそれを祝福したい感がある。

友と連れ立つて散步してゐた私は湖邊へと急べ可く草叢を横らんとしたのである。友曰く『夕ぐれに男連れで草叢を横ぎつてはいけない、況んや今や夜のとびらもおろされて戀しき男女親しき友の一對はキユピットの征矢ならねどもつれ合ふ喋々のそれの如く、蜜の如くさゝやき合ふてゐる際ではないか。英國の道德

として夕景より男のみの連れか、はた男獨りの散歩は眞スグ歩路を散歩すべきもので、叢むらへは行つてはいけないこととなつてゐる。それは突然の草叢襲撃によつて喋々の樂みをさまたぐるからである。いな紳士といふものは草叢への突入は勿論、犬のふざけてゐて狀さへも横眼たりとも眺む可きものではない』と。

つく〴〵思ふた、好奇心さへもためざるべからざる不自然の悲哀を感ぜざるを得ざる英國紳士となるまたかたき哉と。嘗つて聽くロンドンのキリスト教の牧師が新聞にロンドン市民への警告として發表して曰く「此の間一夜月明ハイド公園を調査して見ると男女の連れは八十幾パーセントに於て共の兩者間に如何がわしき行爲あつた。かくの如きはロンドン市民の墮落であり英國民の腐敗である。よろしく反省自警しなければならぬ」と。ところが翌日の新聞に此の牧師の警告に對して告ぐとして曰く「昔牧師は瞑想と思索の緖をたぐる可く月明遙かに天上の美に打たれつゝ星の美に醉ひつゝ天上を跳めつゝ地上靜かに歩を運びしものとか。然るに現代は天上を眺む可き牧師は月明天空の美さへも打ち忘れ地

上のみ見否な探し廻る様になつた。昔も今も牧師は牧師であるも人の變ると共に牧師の墮落したのであるか、はた腐敗したのであるか。」と、殆んど問題とさへされず、一夜苦心の牧師先生の調査も、あはれや彼方へも捨て去られたと。

三

もし之れを東方君子國に見るに各人皆君子たるの手前か堂々たる新聞の三面は殆んど他人の內的生活の情事に關した記事のない事はない。昔日比谷公園でお巡さんの電燈は松の下草の間現行犯をさがす可く急しくも驅けめぐつたものだとか聽く。三面記事といひ巡査の行動といひ、あるひは石の一つも投ることによつて君子の態面を保てると自惚るゝ東方君子國の人々に私は考へて貰ひたい。同じく島國でありながら東と西との存在の位置の相違のみによつて右の様な等しき事實に對して採る世人の態度は全く反對の狀態を呈してゐるのである。英國人に云はしむれば「皆人々は各々自立の人格を有してゐるので、從ふて義務をも

責任をも意識してゐるから、從ふて其の行動に對して彼れこれ批判がましく況んや内的生活に立ち入るが如きに於ては……」と。

私は歸つて三面記事を見る際渡歐前と全く反對な、前は喜んで見た態度は今日は不快を以て眺める樣になつた此の變りを自分から氣付かざるを得ない。私は此の兩者に對して別に善惡の價値判斷をせんとする者ではない。私は此の兩者に直面することに於て兩者間に恰も巡査の手や、指の動搖數の如き兩國民性の差違が認められるではなからうかと思はれてならない。コセツイた國民性を脫して大きな國民性への養成に――もしこの意識的努力なくば、途の中ばに勞れ果てるものでなからうか。頭の鋭敏さに於て決して他の國の後に落ちざる我國民の資質を知る時、私は大きな聲で叫びたい「日本人よコセつくな」と。

（『駿工』大正十五年四月號）

五　新聞觀

一

現代は實に新聞の時代である。新聞は輿論を構成し輿論を指導する。實に我々は新聞によつて有るが儘の現實の社會相を知り、且つ意識的に、はた無意識的に其の指導を受けつゝあるのであつて新聞紙の使命たるや偉大なるものである。換言すれば、新聞紙は現代文明の產物であると共に、來るべき文化への指導者である。

新聞――何人を問はず現代人に於ては殆ど之を手にしない者はない。都に居る人も地方に於る人も此新聞紙によつて始めて色々の現實相の報道を受ける。

現實としての新聞の威力！　我々が之を否定するには餘りに明白なる强き事

實である。然るに我國の一部に於て新聞と聞いてフンと鼻で挨拶し、新聞屋かと侮辱的の言辭を弄する者がある。然るに又一部には新聞を鬼の如く恐れるものがある。此の兩者を對比して思ふ時、然らば新聞の本體如何、何れが是にして何れが非か、其の幻影を去つて新聞紙の眞實相を捕へなければならぬ。

明治維新に於ける五ヶ條の御誓文中の「萬機公論に決すべし」とは千古を貫くべきものである。げに外人をして明治維新は奇蹟なりと讃美せしめたのは全く此の御誓文實行の結果に外ならなかつた。

然らば公論とは何ぞや、國民の是とする論、卽ち衆社會人の正なりとする論卽ちこれ公論である。故に維新當時の此の公論なるものは今日の用語で云へば輿論に外ならぬ。換言すれば萬機は須らく輿論に從ふて決すべしと云ふ事である。是に於て我々の眞理探求のメスは輿論とは何んぞ、輿論は如何にして造られ、如何なるものが輿論の眞相なるかに向はねばならぬ。

二

「民は依らしむべし、知らしむ可からず」の標語の下に政治生活を營んだ封建時代に於ては、政治は專制政治であつて、將軍の言、藩主の語これ卽ち命なり令なりであつた。此時代に於ては被治者の意志は、此の政治意志に參與することは出來得ない。卽ち萬民は愚者として唯依らしむべくして知らしむべからざるものである。從つて知らるゝさへ恐るゝのであるから、下民の語は何等參與の機會がないどころか相互に依ることのみで知ることは出來ないのだつた。だから此時代に於て存在する者は權力者一人の考へのみであつて萬民の考は有り得なかつた。換言すれば輿論は有り得なかつた。元來輿論と云ふことは社會の衆個人は各自に於て考へた思惟は共通であることを意識するに於て、此の共通思惟は卽ち現れて輿論として社會に表現し來るのである。

之を例せば各個人は或問題に就て或考へを有するとする。されど此際に於て

は別れて居る個人の考へで、たとへ其は共通したる考へであつても相互に意識することは出來ないから輿論となり得ない。しかるに此の別れ〳〵の各人は、相互に各自の意見を知ることによつて、而も共通なる意見なることを意識して玆に各自の意見は、其の正確の强さを增し來るもので、此が卽ち輿論となつて構成され、表現される。此際我々が注意しなければならぬものは此の意見は共通なりと知ることは如何にして出來るか、換言すれば各自の紐帶は如何にして結ばるゝかと云ふことだが、是こそ印刷術の進步に其の芽を發し、新時代に現れ來つた怪物卽ち新聞である。卽ち新聞てふ運搬者によつて各自はその意見を知り、且つ意識し來るので玆に輿論として現れるのである。云ひかへれば輿論の構成は新聞に依るものであると云ふも過言ではない。

三

我々は輿論は新聞によつて造らるゝことを知つたが、玆に我々の興味は前に返

つて新聞の眞相は然らば何物かと云ふことである。

「現代は民衆の時代なり」と喝破してゐる社會學者がある。蓋し現代は群衆の時代なりとの語に對する反語であらう。之を例せば、議會に重大問題があるとき、人々は日比谷を目指して集まり來り大なる群集となつて議會に殺到する。さうして色々の示威運動が行はれてゐる。一度この群衆が大浪の如くウネリをなして殺到し來る時は、正に內閣も今や崩壞せんかと危まれる。否短見な政治者流によつては革命來と迄あはてる者もないではない。

されど激浪一過、群集散ずるや四圍寂として聲なく、殘るものは正に消えんとする水泡と云ふ有樣である。之れ卽ち群集で、その集まつた瞬間に於ては密集しては物理現象によつて感情の高潮を來すも、一度散ずるや其處に何等の勢力も認める事を得ない。卽ち正しき輿論は群集の意見にあらずして、公衆の意見であらねばならぬ。公衆の意見とは取も直さず各衆個人はかゝる事は共通なりと意識する一致の意見こそ公衆の意見で、此處に輿論として表現されるのである。

而して公衆の意見をして輿論たらしむるは、取も直さず新聞である。即ち新聞によつて輿論は構成されると共に、新聞によつて主張し叫ばるゝに到り、動反動、層一層その輿論の强さを增して社會を動かすことになる。之に就て私は再び「現代は新聞の時代なり」と叫ばざるを得ない。

（『日本大學新聞』大正十年十一月）

六　角館町の都市計畫

一

何日ぞや角館時報紙上に「小倉山の花の計劃」を見た際、私の頭にひらめいて來たのは、此の命題であつた。小倉山の計劃や大によし、況んや京都嵐山化の理想やよりましてよい。然れども部分々々の花園や優美化は無きにまさること數等なりとは云へ、もし其の雜多に統一なく、而かも單なる花園化は我國中東北にのみ殘されある雄大なる自然美の破壞となるの恐なしとはいへない。こういう立場から私がなつかしき角館の爲め鄉土愛の上より、町の人々の注視の視線の一轉回のもとに漸時私の話を聞いて貰ひたい。

都市計劃という語は震災と共に廣く一般化した關係上、東京市と結び付き、東京

市即都市計劃と觀念され、ともすると都市計劃なるものは東京以外に無きが如くに觀察さるる考へもないとはいへない。

二

元來都市計劃なるものは都市自身を一全體と觀念して、都市は如何にあらねばならぬかの理想のもとに生まれ來る具體的なる都市案である。それであるから東京市にのみ都市計劃は限定さる可き筈なく、大都市といはず小都市といはず、普遍的に其の各自の都市が自己を反省し批判する所に、所謂此の都市計劃なるものが生まれ來らなければならぬ。こういう立場から、角館町も在るがままの自己を顧み、一理想の鏡に自己の醜態を暴露した時、そこに「角館町はかく在るべし」といふ都市計劃案が生まれ來らなければならぬ。換言すれば都市計劃案あることは、角館の夢死の境に迷ひ居らざることを證明する。再言すれば、我が角館が若やかき發展の途上にあるとすれば、恰かも大成する青年に大理想無からざる可からざる

と同じ様に、先づ其第一歩に目指し理想案たる都市計畫案を有さなければならぬ。

三

角館に旅する客人の安價なるお世辭たる「美しき角館」の語の中に自惚れ、在るがままの角館の現相に滿足する人もしありとせんか、そは郷土愛の盲目的感情に陷り、冷たくも倘光輝を內有する所の理性を掩ひ退くるものであつて、恰も一青年が戀愛を高調し愛人の一夜の抱擁に全生涯を捨てても惜しまざる態度と其の軌を同うするものである。なるほど其の藝術の對象として詩人に歌はれもしようがそはその御本人丈けであつて、第三者の眼より見た際に於ては「井の蛙」のそしりを免かるることを得まい。封健時代の角館は仙北の首府であり、羽後に於ける注目すべき城下町であつたらう。ところが先輩に依つて、ロンドンのテイムス河の流れが、東京は品川の水に通ずることを悟られた頃から、大きな時勢の流れは角館町の獨りよがりの安眠を許さない樣になつた。頑固で、意地ばりで、負け嫌ひの角館

魂を前提に置く時「美しき角館」の讃美を旅人の口より聞かぬと承知が出來ない所の我が角館人も、世界を旅せる學徒の口より角館都市の現狀が批判されなつてない早く目覺よ」と叫ばれたと假定せよ。此際、意志強く自惚强き角館の人は大に怒るだろうか。然り、大に怒るだろう。「何を生意氣な」と、或はゲンコツを振り廻すかも知れぬ。併し相手がピストルを持つてゐることを知つた時、翻然と我れに返り笑顔のもとに自己の愚に氣つき、握手するの賢さを有してゐるのが、まさしく我角館の人である。

賢明なる角館人を思ひに浮べ、頑固意地ばりと負け嫌ひの特性を結びつける時「美しき角館」の語を、何日迄も保持し存續しなければ承知しない角館人が結果されて來る。

然らば問題は再轉して如何にして永久に「美しき角館」の名稱を保持し存續し得ようかに移らなければならぬ。

四

角館町の都市計畫は、然らば如何にあらねばならぬかの命題に接した時、私の頭にひらめく案は、直ちに具體案として現はれる。それは私の長き學窓生活を送つた南獨逸のフライブルクの町に英國のオクスホルドの町が加はり、それにセキスピアの誕生地たるストラスホルド、オン、アボンが入つて來る。我が角館は此の三者をつき混ぜて其の長所を採り、而かも其の中心觀念に日本の町を置くことを忘れないことだ。角館の都市計畫は、まさしく是くあらねばならぬ。否な是く在ることに於て角館は永久に「美しき角館」の名の意味づけと價値づけを見出し得るのである。

五

私は漸次右の三者の長所を述ぶるであらう。

私は理想の表に獨逸のフライブルヒの町を浮べ來る所以はこうだ。嘗ては世界を支配し、否な其の未來にも大なる光明を依然として有する獨逸文化を振りかへる時、その森の生活を忘るるを得ない。

『森の生活、獨逸を旅する者鋭き目を有すると鈍きとにかかはらずこんもりとしたる森と、大きな規則正しく植えられた林に注意せずにはゐられない。げに森の生活はゲルマン民族の本有のもので全く其の家であり、はた生活全體であつた。

　而かも森の只中、其の森より生えぬけた様に大と小とにかかはらず、町といひ村といひ、名のつく人の集團をなす處には、天をさして屆かんばかりのゴシック式の寺の塔が目に見ゆる。

　天日をも掩ひ隱さん森の中に住へるゲルマン民族には、その宗教生活に於ける神への感謝とその祈りの純眞なる態度に於て、神祕の環境に育くまれるのである森の神祕に根強く基礎づけられ育ぐまれたゲルマン民族は、神は天より來るとの觀念と、寺は神の御住ひなりとの二つの觀念の結合に於て、其の寺塔をして天にも

屆かん程の高き所謂ゴシック式を生み出した。純眞なるこの民族は、此のコツコツと積み立つる石によつて彼等の祈りの對象たる神に達し得ると考へたのである。換言すれば、祈りの宗教對象を終局にしたる長き努力と共のもがき、その示す寺塔の天空にそびゆる共處に、民族特有の神祕主義を背景にしたる强き意志の現れを示してゐるのである。……此の意志文化こそ重豪なる彼れゲルマンをして世界に誇り得る獨逸文化を產んだ所以である。現世紀に於て、獨逸文化は世界を支配せんとの勢を呈したのも、そは古代人のゲルマン人が神への憧れに積み重さねたる寺塔の過程は、そのまま現世紀に於て、宗教に置きかへられたる理想への憬がれとして、その現實化への努力である。換言すれば、武力國家として、文化國家として、理想主義の個人として、彼等の努力と精進は、そこに科學の隆盛となり、發明の創出となつた。そは要するに意志文化の產出たるに、其の基礎を同うする。……』（拙著「社會學徒の描く世界」中の「獨逸文化」の條下）

六

フライブルヒの町は實に以上の獨逸文化の中心觀念を如實に現してゐた。小さな大學町はその神祕たる森の生活そのものたる山の裾に構成された町である。而かもその山は尚ほ暗き大きな數多い太い杉木を以て掩はれてゐる。散歩の道は其の中を曲りくねつてゐる。日曜の散歩に、はた疲れた時に朝な夕な思索の歩をつづけ得たあの山を、私は忘れることを得ない。

現代資本主義文明は、文化の重大要素なる神祕主義を前提にしたる重豪なる性格を磨滅し去つて行くのを認むる。而かも都市文化は漸次田舍を襲ひ來りつつある現狀に於て、此の重大文化要素は、漸次消滅への流れにあるを認めざるを得ない。私は高所に立つて考ふる際、飽く迄も此の文化要素を保護しなければならぬ否な發展せしめなければならぬ。此後各國の文化の發展如何は、實に此の要素の保存と發展如何にかかつてゐる。而かも我國は一般に此の要素の保存を僅かに

東北に殘存してゐるに過ぎない東北人は。此の意味に於て文化昂上への戰士であり選良である。而かも獨逸なぞと比較する時、其の密度は薄すひ。こう考へて來た時、我が東北人は意識的に此の文化要素の保存と存續と發展とに努力し配慮し苦心しなければならぬ。

こう考へて來た時、角館町は眼前に展開し來る。あの花場山や田町山や、はては大威德山に於て、はた小倉山に於てさへ、その中心は飽迄も前述の中心たる文化要素の保存を意識して造られなければならぬ。大きな杉林や鬱蒼たる雜樹や松林等が考へられ、意識され來つて、角館町の周圍の都市計劃が構成される。

七

基本文化要素が以上の如くにして認められたとして、次に一體角館町存在の中心は今日は何んであるかに注意の眼を見はらなければならぬ。在るが儘の角館は其の歴史に於て城下町である。封建制度の遺物としても城下町としては、尙ほ

今日迄も存在してゐるが、既に封建制度の使命の去つた今日、周圍十ケ村を外圍に有する一經濟都市としての使命である。換言すれば角館町はそれ自身に於ては生產都市としての獨自の生命はないが、周圍十ケ町村に依存したる生活態たる所に角館町の經濟都市としての生命が持續されてゐるのである。而かもその精神型態たる處に、城下型態たる武士精神を、一都市社會意識としてゐる處に、他に見ざる特獨の精神型態を見る。之れはあるが儘の角館であるが、以上の經濟都市としては汽車が通じたることに於て、大部使命を減じつゝある。こう考へ來ると、在るがまゝの角館は、退步への道を踏みつゝある樣である。もしそを阻止し得るとすればそは周圍十ケ村の中心としての消費都市としてゞある。こう考へて來ると角館町の前途も亦危き哉である。

しかし幸ひ角館には、尙ほ世界に誇り得る所謂サムライの精神型態を保存してゐる。此の武士は食はねど高揚枝の態度は、其の中心に於て、文化の世界の中心觀念である。文化は學びの園より發する現狀に於て、我角館は此の精神の社會意識

を有する限りに於て、そはまさしく文化の一中心たり得ることを證明する。換言すれば角館は文化の發生地たる大學町たる可能性を有する。「角館に大學」の夢を語ると云ふなかれ、我國の學の發展は、秋田縣に三、四の大學の存在を要求し來る可能性がある。そは何も夢ではない。現實として獨逸の現狀に目睹し得る。かく考へ來るとき、角館は文化を生む大學町たることを意識することに於て、積極的なる角館の意義と使命を見出し得る。我が角館はすべからく、大學町たることを中心意識として、都市計畫を定む可きである。

八

大學町としての靜寂と、その明るさに於て、私は英國の有名なる大學町たるオクスホルドの町を、その一型態として擧ぐることを、ためろう者ではない。

『町は閑靜にして、廣き路は自轉車馬車と徒步の人の時折り行き交ふを見るのみ木立の間、壘の如き青草に覆はれた別莊式の住宅は並んでゐる。其處には都會に

見る如き三階四階の家はなく、たまにあつても二階而も其は稀れに多くは平家で草花に敷かれた庭園に圍まれて、えも云はれぬ、心のすが〳〵とノンビリした田園の氣分を味はせる。現代人の憬るゝ文化都市を現實化するも、之れ以上のものは無からうかと思はるゝ此處オクスホードの住宅街は全く理想的のものである。其の昔ロンドンの塵を遠く離れた此の村に大學を建設したるアングロサクソン人の先見の明と其抱負には讃美せざるを得ない。獨立したる大學理想の學園としての大學町、其處にては政治の權力も富豪の勢を以ても大學の獨自性を毀損することは出來得ない。』(同書英國の大學)とある如く、家の如きも二階以上の住宅を禁ずることや、その現代文明の病患たるザワ〳〵さは毛頭存在を入る可きでない。

九

次にセキスピアの誕生地たるストラトホルド・オン・アボンの町の要素を加味せしめたいと云う意味は、此の町は、英國に於て人口一萬足らずの農産物の集産地たる小都市たる意味に於て、次に周圍農村の消費都市たる意味に於てゞある。

『市街の中央の焦點に立つた私は、先づ驚いた。それは此の一萬足らずの町が十五間道路によつて中央部が構成されてゐることだ。而かも街頭は實にキレイに掃除されてゐて、行く人も來る人も、キレイにサツパリしてゐる。其處には都會に見る如きそわ〳〵した足どりの人もなければ、町の周圍にある小河の流れや、綠の木は人々に平和と靜けさを與ふるに十分である。田園都市としての此の町アボンは、實に田園都市としての理想の現實化の一つであらう。……』(同書『ハイランドの曲』参照)

角館の現狀に於ける唯一の使命は、消費都市たる所にあることは既に之を述べた此の意味に於て角館町は周圍農村人の愉快なる氣持ちよき都市たる中心觀念を忘れてはならぬ。此の前提觀念より道路美としては十五間道路を要求し來りはたその建築に於ては、參差たる雜多美にして、而かもその家の存在中心觀念を發露することに於て、其の美を現すことを知らなければならぬ。町の周圍の花園化

かくして此の前提を觀念するに於て、意義をより多く有し來るのである。

私は此の考へより、氣持よき都市たらしむると同時に、むしろ積極的に農村人の都市へと歩みを運ぶ機會を意識的に造るのは、角館人の努力すべきことではなからうかと思ふ。かの角館のお祭の如きも此の意味に於て使命を果すが、而もそは僅かに年一回にすぎない春の期に南フランスに展開されある如き「花祭」（同書「花まつり」參照）の如きを、角館がやることも面白く、かくすることに於て角館町の經濟的文化的使命を果すものではなからうか。

一〇

要するに都市計畫は、現代に於て古き殼を脫し、新しき都市として生まるには避く可からざる、且つ採らざる可からざるものである。實に都市は、それ自體全體として藝術の對象としての美であらねばならぬ。かの一技術者のみに任かされある我國の都市計畫は愚の至りである。

我が角館にして、一日も早く眼覺め、高遠なる理想のもとに、都市計畫の理想案を構成し、一木一草、小倉山の花も、田町山の林も、此の理想案たる統一ある雜多にして始めて意義と價値とを生み來すものである。私は繰り返して云ふ、理想案たる角館都市計畫案の確立は急務であると。

（『角館時報』大正十五年一月一日、一月十五日、二月一日、二月十三日の各號連載）

實業補習教育の改造

本篇は『秋田新聞』(大正九年七月七日乃至十日)に連載されたものである。

×

私は此度、文部省から、秋田縣の補習教育を視察して來るやうとのことで、只今秋田市に着いた許りである。此際、補習教育のことに關し、一言述べて置くことは、必要なことだと思ふ。何故となれば、補習教育の意義は、全く此れまでとは異つた行き方をしやうとしてゐるから……。

一

之れ迄補習教育と云へば振はざる教育の代名詞の如く取扱はれて居たのであつて、之れは勿論時勢未だ其期に至らなかつたと云ふこともあるが、一には文部當局も亦責任ないとは云ひ得ないのである。

元來、實業補習教育は補習の字之れを示す如く、其意味に於て小學校教育を主としての不足を補ふと云ふ解釋を下されて、從つて結果として現れたる補習教育なるものは、一二の大都市をのぞいては、其の効果に於て顯著なるを得ないで、單に小學校教育の補習的のものに終つたのである。

然るに偶々歐洲戰爭によつて刺戟を與へられ全世界を通じて「改造」の聲巷に滿つるにあたり、其のレコンストラクションの基調は教育の力によるにあらされば解決すべからずとの強き信念を以て獅子吼したのはかの有名なる英國ロイトジョージ內閣の文相たるフイシヤーである。彼れは戰爭中獨逸の强兵のよつて來る處を洞察すると共に、此後の支配者たるべき素地として彼れは義務教育案を提げて議會に面したのである。當時黨は日々の急務に襲はれてゐる際流石は大英國の代議士である。靜かに彼れの要求に耳を傾け彼れの提出したる教育議案即ち十六歳迄の普通義務教育に加るに其後二ケ年十八歳迄の實業補習教育義務を課せんとした案を一擧にして可決したのである。最近に着いたロンドン・タ

イムスによれば五月一日より愈々實施しつゝあるとのことである。

獨逸に於て戰後新內閣によりて改造されたる新憲法によると、其の條文の一ヶ條として十八才迄の補習教育は義務であると强く言明してゐる。元來獨逸は有名なる教育の國で、戰前十八歲迄の補習教育は殆んど實施してゐたのであるが、此處戰後の疲弊にも拘らず新憲法を以て之れを强く法文に言明した譯である。然らば佛國はどうかと云ふに、之れは戰時中二十歲迄の補習教育義務を決定した程で、其の實施は如何になつてゐるか未だ詳細は知り得ないが、兎に角十八歲迄義務はとうに過ぎ去り、二十歲迄のの義務を叫んで居る程である。

次に米國は之れ各州によつて異るが、殆んど十八歲補習義務は實施中のもの多數を占めてゐる樣な譯けである。前述の如く歐米先進國の狀況を詳知し、而も社會思想の混亂と解放改造の叫びの眞中に立つた我國も此處で想ひ一考せざるを得ない。

元來我國には惡い癖が、あつて教育問題と云へばゴク閑な時でないと論じない

樣な譯けで、從ふて教育問題と云ふと議會でも厄介視して後廻しにする、よくない傾向がある。之れ有職者よりしてとうに慨嘆されてゐた處であつて、所謂今日の代議士樣には英國議會の爪のアカでも飲せてやりたい感がする。

之れより先き文部省は之れ迄廢止されてゐた實業局を復活して、それには達識なる山崎達之輔氏を局長に補した。此の新局長により、また文部の當局により注意されたのが、歐米の戰後の教育政策である。此處に於て『戰後我國の教育は如何にすべきや』の問題は痛切にさし迫つた問題となつて現れ來たのである。

二

眼を我國の現狀に轉ずるに、義務教育の延長は未だ時機が熟さる際、如何にして十八歲迄義務として强制しつゝある歐米先進國に伍すべきか、此處に生れ來たのは補習教育の改造である。當局は顧る處あつて次官を委員長として實業教育改止委員會なるものが、昨年構成されて引續き會議を繼續してゐる。其の項中に於て

實業補習教育は最も改造すべき使命を帯んでゐる。私は其の詳細を言明する自由を有さないが、少くとも私一個の意見としては次のことが、云へると思ふ。即ち實業補習教育によりて『中等教育の社會化』を計る。換言すれば實業補習教育の奬勵によつて國民の教育の平均線を中等教育の處迄引き上げる。再言すれば實業補習教育によつて、一には自已教育可能の圏内に入らしめ、他面職業としての實業生活によつて一國產業の昂上を計るのである。自已教育可能の範圍は碎いて云へば新聞紙が興味を以て讀める樣になる程度で此の域になればあとは自分で自分を教育する樣になるものである。

之れを要するに之れ迄の補習教育とは全く意義の異つたもので、補習では無くして繼續教育である。六年の義務教育で完成し得ないのを、より以上に完成すべく教育の繼續を望むと共に之れを實業化せしむるのである。理想を云へば歐米の如く十八才迄を要求するを望むも、少くも二ヶ年の義務延長にプラスの二ヶ年の實業補習教育の義務を强制したならば、いくらか其の希望に近づき得るだらう

が、それでも十六歳迄となるとしても歐米の十八乃至二十には尚ほ數年の距離が存する次第である。

十六歳まで教育の强制をなし得たならば、多年有識者及び社會教育家の理想としたる中等教育の民衆化は、此處に實現可能の曙光を認め得る譯けで、歐米先進國に遲れざらんことを期するに、少くも前述の十六才迄の案は一日も早く其の實施を急かざるを得ない譯けである。

三

以上の如き理想案を以て現狀に當つた際、果して現狀暴露の悲哀なきや。未來は現狀の流動である、現狀を無視したる際は空文に終る。然ば現狀はどうか。併し注意しなければならないのは現狀重視に傾き過ぎて我々の竟志の力を認めない論である。

我々は現狀より流動したる理想案は確かに實現可能であると信ずる。意志の

力――理想案は此處に現實案となつて生れ來るのである。殊に歐米先進國の踏み行く樣を見ては、晏如として腕をこまぬいで居るを許さない。

然るに國情は尙此の理想を認むる迄に至つて居ない。然らば如何にすべきか。此處に地方有識者、所謂選良の自覺したる共力に待つより外に道はない。

殊に現代文明の特徵たる都市文明は、地方人の都會化によりて構成される。實に農村は現代文明構成者の卵であつて、行つて都市文明に參與すると、止つて農村にあるとを問はず、此の地方人の敎育程度の向上は我國の來るべき文化の向上に正比例するのである。

而も農村には此處に團體意識の强烈なるものありて、兼箇人心を壓倒するものであるから、地方の有識者の自覺したる敎育奬勵案は確かに結果に於て强制義務と等しき功果を上げ得るものである。　願はくば遲くも本年中に出る筈になつてゐる改正案に則り、其の精神を汲んで當局の微志を了し、一は以て本縣の敎育を高め、他縣より遲れしめざらんことを我が鄕里たる秋田縣の有識者に對し切に望ん

で止まない次第である。

八　鄕里の女子教育に就て

本篇は、鄕里、秋田縣角館町の『角館時報』（大正十三年十二月十五日、大正十四年一月十五日）に連載したものである。

×

S兄、毎度『角館時報』御惠送下されて有難ふ。御陰で角館の近況、廣くは仙北の情況が知られるので何日も喜んで讀んでゐる。

兄と御別れて以來、何か書かねばならぬ、又書きたいと思つてゐたが、色々と學校の方の忙しさに其志を果し兼ねてゐた。それに毎日少くとも半日は或る著述へと志して意識的に努力してゐる、學びの庭に春草を食ふ牛の如くコツ〳〵とのろき歩を運んでゐるのは私の今の生活である。

×

角館時報を見る度毎に思ふのは我が鄕里の方々には新聞の意義と共のはたら

きに就いて深き理解と知識との二點は、どうも缺けてゐはしないかと思はれる。

元來時報の誕生は中學校の誕生と相並んで角館文化の現在及將來によりて深き〳〵意義を齎すものである。私は玆に今更らしく教育の意義とか新聞紙の使命とかを述べることは止めるが、中學校に就いては非常な熱心さで進行されゐるが新聞に就いてはコワイ物に觸れないの態度があるではなからうか。もし然りとすれば、之れは思はざるも甚しいものである。第一に新聞はよろしく角館人に依つて利用さるべきである。もし利用の語曲解の恐れありとすれば、そはよろしく鄕人によつて大に使用さるべしと申し上げよう。

あの廣告の如きは大に商人によつて用ひらるべきもので、かの歐洲の例を引く迄もなく、かの資本主義經濟の殆んど全部は此の廣告の利用によつて生產品を賣りつけ得るもので、廣告の利用と商賣の點に關しては、至る所の歐米の大學及高等商業學校に於いて、廣告研究の課は獨立したる一課目を構成してゐることを以つても伺はるゝ譯である。

兎もすると地方の新聞は區々たる地方政爭に沒頭するかたむきがあるが、之れは我國の商人は新聞を理解しないことから來るので、政爭の如きは新聞から見れば一の小なる部分に過ぎないものである。だから私は聲を大にして言ひたい。角館の商人は須らく廣告を利用せよ、店頭に座して只華客を待つが如きは商賣上末である。積極的に新聞の利用と其の街日的廣告によつて客を引きつけよ、時報に現れ居る廣告を見るに何日も同じ廣告の如きは廣告の理を知らざる事おびただしい例である。廣告の度ごと目さきの變つた一日、人の眼を引きつける要點を握つて廣告心理を極度に應用すべきである。新聞社も亦政爭の如きは一の小部分として商人の爲めに紙面を提供し、寧ろ指導的態度を以つて廣告利用の道を開かれんことを望む。云ふまでもなく新聞には社會の耳として眼としての任務と共に深き文化指導の任務あることを忘れてはならぬことは勿論である。それから之も新聞を見ての感想の一つだが、私は聲を大にして我が郷里の先輩並に友達に御尋ねしたい。

そは「郷里の女子教育に就て成算ありや」である。斯く伺はゞ大に考へつゝありと御答へ遊ばさるることと思はれるが、云ふを止めよ。一の實行は百の思考よりも優る。幾年かの後に「我が郷里の先輩は特に女子教育については色盲であつた」と奮慨しうらむ女子が、我が角館學園の庭より生れ來た際、何んと御答するの御考か。空想？ 云ふ勿れ、我が郷里角館は文化の立場より見て決して仙北の角館とか、秋田の角館とかいふ小さなものではない、東北の角館であり、日本の角館である否世界の角館である。此の世界文化の空氣の流るる角館より現代片輪な男性中心のみの文化に對して女性の文化發展への參與が早晩行はれなければならぬ。否世界の事實と其の思潮は既に〳〵其思想を認むることは勿論、社會的事實として女の大學教授、女の大臣、女の代議士、女の實業家等、あらゆる方面に其の才能を發揮して來てゐる。女の選擧權の如きも、女性を否定せんとする我が政治思想界に於いてさへ、早や議論の問題ではなく、實行の問題であり、時の問題である。

「他の娘は總て聰明であれ。我角館の娘達は汝等のみが馬鹿で男の奴隷として

終始せよ」と若し云ふ人あらば、世界の娘としての我が愛する郷里の娘達は何んと云ふだらうか。何んと思ふだらうか。

もし現狀のまゝ放棄する時は、正に前言と等しいものとなる。

もしそれ富める家の娘は秋田へ、はた大曲へ各女學校へ行きつゝありとうそぶく人あらんが、私は敢て云はん、そは一部のみ、大部の娘達は學ばんとして學ぶ能はず、行かんとしても行き得ざる事實を如何に。金の有無に依つて運命づけらるゝ現代社會を批判なしに認る人あらんか、そは餘りに愚である。時の流れは餘りに早く來り過ぎつゝある。時流に逆ふ者は溺るゝより外はない。で結論へと急ぐ。問題は簡單だ。一日も早く高等女學校を設立せよ、今中學も建つとか何んとか騷ぎゐる際をと問題にされないかも知れんが、然らば單的に過度案として現存せる補習學校を女子中心として活躍せしめよ。形式は何んでもよし、內容に於いて女學校と同等のものたらしめよ。それには山形縣にある上の山の補習學校の如きは好適列だ。依つて以て範とせられよ。

一體今頃中學校問題でグズ〳〵騷ぐが如きは、餘りに時代おくれだ。かの大曲に於いて農學校設立當時すでに〳〵說く可かりしほど左樣に自明なのである。角館に中學校なきため、如何に多くの秀才が埋木となつたか知れない。仙北の一隅桃源の夢を見居りし先輩は、消極的に此の怠慢の責を免れることが出來得ない樣である。我が秀麗の愛する角館の山河は、正に大學町としての適所である。もしそれ此の山河が歐州にあつたら既に既に大學町として發達し、意義ある世界文化構成への歷史を有してゐたであらう。例へば獨逸の田舍大學町としてのフライブルグやハイデルブルグの如くに。

私が鄕人に願ひたいことは、かうした大なる抱負を以て我が町を教育の地として實現すべく努力され度い事である。一中學を以つて安んぜず、速かに女學校の爲にあらゆる考慮と實現の方法に就いて研究し努力され度い事である。甚だ蕪雜な事をならべて貴紙を汚して濟まないが、何れ又今後に譲る。

九　宗教としてのマルクス主義

一

『社會主義は現代に於ける一種の宗教と云ふべく、其勢力には何物も抵抗し得ざるの觀なきにあらず。』とは、既に先覺者戸田海市博士の喝破したる所である。（同博士著『社會政策論』一五八——九頁）。げに現代在るがままの社會運動は、社會主義の名のもとに統轄され理性の世界を抱合し、飛躍して全感情の依存となつた現狀は全く宗教の域に入つたのである。殊に露國の革命以來、社會主義の妖怪は漸次像を明にし來つた。即ちマルクスの思想を中心にしたるものにして、之れを名づくべくば、マルクス宗と稱ふるを適當と思う。

二

學史上に於て此のマルクス說は、幾多の難點を有することは、之れ迄の學者によつて既に說かれてゐる。科學的社會主義の名のもとに論ぜられてゐるけれども、銳さと精密さとを以てそを點檢するならば、依然として一の哲學說に過ぎないことを知る。當時、英國に於ける在るがままの資本主義世界に於ける因果の說明に其の努力をはらわれたる點には大に敬意を表すべきものであるけれども、其の觀點に於てヘーゲルの方法論に立脚せるが如きは、確に歷史哲學としてのマルクス學說の出發點が切られてゐることを察知することを得る。而かも科學の世界に存在を許すべからざるイデーの潛在的現存は、その全著を通じて脈々として流れてゐることをのぞくことが出來る。そは展開されたる資本主義の嫌惡であり、わけても資本主義國家の倒壞である。就中、猶太民族に對する他民族の迫害の現相には、惠まれざる猶太の子として、暗がりの心に光を望まずして過ごされるものではない。（拙著『社會學徒の描く世界』中の『ハイゲートに詣ふでて』參照）。

過言すれば、冷かな世界に靜かに解剖のメスを採るべき筈の社會科學者として

のマルクスは、科學的社會主義の立場をうらぎつて、溫かき熱の世界に何日の間にか深入りして、イデアの世界に憬る哲學徒に變つて仕舞つた。 此のイデアとザインの兩世界の間に横はる橋梁こそ、かれの大著『資本論』である。

三

ギリシアの昔より現代に至る哲學史を眺むる時幾多の哲學者と稱する名匠が幾多の苦心と其の知腦の全部を傾けて、其の普遍妥當なりと思惟せる學說を殘した。 が併しそは恰も砂原に築ける砂丘である。 築かれたる砂丘は、其の人の逝かざる先に、早や浪の前にくづれ、次に築き上げらるゝ幾多の天才による砂丘が打ちよせる小浪によつて洗いさらはるるのである。 さらはれては築き、築いては洗はるゝの運命に置かれた哲學徒の運命は、また哀れにはかなきものである。

我々は此の哲學徒の殘せし歷史の步みを實相として認識する時、哲學者としてのマルクスの運命も、誰れか大浪の前の砂丘にあらずと强辨するの勇氣があろう

か。 而かも漸次學說としてマルクス說に幾多の難點を指摘せらるゝに於て、其の感を强うせざるを得ない。

四

學說として其の權威を疑はれ來つた現狀に於て、尙ほ依然として否なより、强くマルクスの名は叫ばれ求めらるゝのは、然らば如何なる理由であらうか。 思索の糸は現相の認識に移らなければならぬ。

現代文明であり文化である資本主義の層は、過去の文化層と文明層とを土臺として積み重ねられ、佛蘭西革命によつて完全に占領し得たる土壤に美しくも花と咲いたのである。 が併し爛熳たる花の盛りにも、やがては萎める花の運命を免れない。 而かも其のかざせし武器たる自由平等のモットーの中には次に咲くべき社會主義の花の芽を含んでゐるのである。

價値意識の推移は、一般民衆たる社會人の目覺めとなり、目覺は批判となり、イデ

アとザインの間にかくして不平が生れ來たのである。此の不平の惱みは、谷間深くも知識の菓實を求めてさすろうた。そは知のもだへを醫やさんとしてであつた。偶々發見されたのは、マルクスの學說である。飢えたる民衆は永く求めて得なかつた菓實を食することに於て、漸くみたされ、かくして自己の學的背景たる虐たげられたる民衆の哲學は、供給されたのである。實に此の菓實となり哲學となつたのは、マルクスの學說であらねばならぬ。

學の經過はマルクス學說の批判となり、その難點の發見となつても、そは學徒のみの世界で社會實相の需要によつて發見されたるマルクスを一般民衆は離そうともしない。社會民衆は論理の遊戲には興味を有しない。そは彼等の求むる世界は左樣に切實であつたのである。惱みと悶への中に與へられたる藥は、彼等の病を醫すに唯一の手段であり、方法であつた。惱める社會は、實にマルクスの投藥によつて、漸時救はれたが如きの感がしたのである。

全民衆は理性の域を越えて全生活を捧げて、其の光明に浴せんとした。與へら

る可き使命を有せる過去の宗教は固定し、支配階級化し而かも單なる靈のみの世界に籠城し、下界の現狀に一瞥さへも與へんとしない。滿されざる民衆の全生活は、人間本有の宗教の世界の要求を放棄するものではない。而かも全生活たる意味に於て、イデアの世界を現存在の世界に含有するものであらねばならぬ。此の全要求こそ、たまたま發見したるマルクスの知識の世界を通じて其の人格に全生活の投影をなすことに於て、其の感情依存の滿足を見出し、かくすることに於て、マルクスの宗教化の作用は行はれ、而かも虐げられたる民衆の實相は、此處に新宗教への投射と慰安と滿足とを見出すに至つたのである。

五

かくして成立したるマルクス宗は果して宗教として發展の力を有し得るものであらうかの問題が、最後に思ひ浮ばされて來る。結論を急ぐならば

(一)マルクスの宗教としては、先づ其の神學的背景を供するの必要がある。

(二)神學的背景を供したる經典と、其の物體化したる教會を必要とする。

マルクスの說、而かも一般民衆をしてうなづかした點は、主として階級鬪爭說の現相の發見であるといへよう。此の點よりすれば、そは一つの方法論であるに過ぎない。飽迄も方法論は第二次であつて、宗教の對象としては、本質は他にあらねばならぬ。神殿の存せざる拜殿は、空虛なものである。之れ宗教としてのマルクス宗に(一)の神學的背景の必要ある所以である。また宗教には(二)經典と教會の共存が、缺くべからざる點である。そは宗教社會意識の物體化に於て、其の基礎の存立と其の發展とに寄與し得るからである。もしそれ以上二點の宗教本有の具備するなくんば、マルクス宗は到底存續し繼續し發展し得るものでなく、やがては民衆の要求せる目的の世界の展開と共に憐れやマルクス宗はうたかたの如く民衆の心より消へうせ、唯殘るは學史上の砂丘に過ぎない運命に導かるゝであらう。

(『宇宙』――大正十四、四、七稿)

一〇　世界社會の硏究

一

『世界社會』なる語は、之を耳にするさへ新しいものであろう。それは其の字の結合に於ては、之れ迄無しとはいへないかも知れないが、私の意味づけたる內容を有する語義は、之れを始めとするものであらう。

然らば抑も世界社會とは如何なる意味づけを有するものであるか。私は社會形態で社會團體と社會圈との二大別を立て、前者の中に於て家、都及村、國等と別けて居るが、此の世界社會を以て社會團體の一形態として觀念し揭げんとするものである。之れは今迄學者に依つて未だ硏究されないものであるが、在るがまゝの現相に於て、此の世界社會の團體の存在を認め、社會形態の一つとして大に硏究す

るの意義と價値とを有するものとするのである。

先づ此の世界社會の概念として觀念すべきは、二人以上の集團生活をなし其の相互に心的作用の影響を與ふるもの之れ社會であり、而かも其の集團に一の目的を顯在的に、はた潜在的に意識さるゝことによつて、そは社會團體となり來ることである。而して此の前提より觀察するとき、全人類、全社會は其の相互に何等かの影響を與ふる意味に於て、そは一の社會形態の對象となり來る。併し無目的なる意味に於て、そは一つの世界社會圏と觀念すべきものである。然るに現代文明國文化國と稱せらるゝ其の相互人の集團に於ては、其の相互影響の大なることゝ其の間潜在的に、はた顯在的に目的意識の存在する意味に於て、そはまさしく一つの社會團體を構成し、所謂この世界社會を社會團體の一形態として觀念し得るものである。

二

我々は直觀の眼を開くとき、各國の大都市といはれるロンドン、パリ、ベルリン、ニューヨーク、東京等は、まさしく此の世界社會を構成してゐることを認め得る。其處には時間と空間との異なる文化と文明との種々相の差異を有せる世界よりの人々に依つて、世界社會が構成されてゐる。此の雜多の意識内容にある種々相の衆個人の與ふる相互影響及び其影響より生まれ構成されてゐる社會、卽ち大都市の都市人の意識は、之れ迄封建制の當時に於いて君主の居城であつたことによつて構成されてゐた意識とは全く異つたものを見る。(註一)そは當時に於ては彼等は其の額に於てこそ雜多相があつても、其の意識に於ては所謂皆同じき同國人であり、同じき文化意識であり、同じき國意識であつた。然るに現世界の大都市の實相を熟視するとき、交通の發達と資本主義の發展は、國意識を超越し利益獲得の中心觀念のもとに、世界の大都市を目指して集つて來た。而かも彼等の運載し來れるものは、種々異れる文化であり、文明である。其の種々相の相互へ與へる影響の意識化する結果として、其の市民に對して全く之れ迄と異なる意識を與ふるに至

つた。此の之れ迄と異なる意識を有せしむ可く拘束へと働ける社會意識こそ、之れ等の種々相の世界より集へる人々によつて造られたる社會の生めるものである。實に此の社會は私の云はんとする所謂團體としての世界社會である。之れを例へばパリ街頭に窈窕たるパリ美人を携へたる黒人ありたりとせよ。而かも之れと行き交う人々ありとせよ。此の場面に展開する現狀を見るとき、其の行き交う人には之れに注視するも、之れをふり返り見るものはない。而かも注視する際の意識は、一は其の美人なることに於て、二には黒と白との調和に於て等であつて、そこには佛國人であり、白色人種であり、ラテン文化人としての佛國美人を、他國人であり自然民族なりとされある黒色人種である、彼れ黒人への反抗的意識は毛頭之れを見るを得ない。(註二)此の意識こそまさしく世界社會の生める意識內容でなくして何んであろう。此の意味に於て、伯林の如き、東京の如きに展開さるゝ現相に於ては、日本美人を携へたる外國人への觀念內容と、その時に現れ來る感情は外國人であり、異文化の人であり、他人種の人であるとの基調に於て、其處には一

つの反抗的とでも云う可きものが去來する。かくて其の行動に於て、振り返りとなり、心中『ウマクやつてゐるな』となり、『降るアメリカの雨に大和なでしこ袖はぬらさず』と自盡し果てた横濱遊廓に演ぜられた女郎の國家心に隨喜の淚をこぼしたくなつたりする。其處に脫せざる國家意識あり他人種卑下の意識の微動が之れ迄像を現さざる潛在意識の顯在となり來るを看取し得るのである。此の場面より見るとき、伯林なり東京なりは、世界社會としてはパリより數等も下であることを意味する。換言すれば、東京伯林は未だ社會團體として世界社會構成への過程にある國際社會なりと云う可きであろう。

三

そこで問題は進展して、然らば此の世界社會なるものは現代にのみ生まれたものであろうかの命題に移る。

之れを文獻として殘されある歐洲に眼を投ずる時、スパルタ、アテネに展開され

たるギリシアを對象とする時、其處には都市國家意識の强烈なる現れを見る。其處には世界社會の生る可き間隙さへ與へない。次にローマを見るとき、なるほどローマ發達の芽である都市國家意識の强烈は依然としてギリシアのそれの如くであるけれども、大なる發展後のローマ帝政時に於けるローマ國は、所謂國ではなくして、まさしく世界であつた。而して其の首府ローマに展開されたる其の文化に於て、文明に於て、東はアジア文明と文化を入れ、西歐の存する文化と文明との共の相互影響に於て、其の各人種と其國人の種々相に於て、その異なる運載されたる衆個人の意識內容に於て、何時の間にか世界都市としてのローマ市には、世界社會なるものが生れ、其の構成されたる意識に於ては、之れ迄とは異なる世界社會の內容を有せる世界意識となり、ローマ市民を拘束するに至り、此處に於てローマ市民の意識は、世界社會へと擴大され、全世界を征服したローマ國人は、他との對立の前提の下に立つてゐる國團體意識を去つて、世界團體意識へと移つたのである。彼等の世界觀の其れに於て、社會觀のそれに於て、人生觀のそれに於て、全く彼等は世

界團體形態のそれであつたのである。之れぞ人種意識に統括されある北方ゲルマン人の襲撃に對して、憐れにもその馬蹄下に蹂躙されたる所以でもあつたのである。

時は下つて中世になると、其の各地に割據して構成された政治制たる封建制を生み、君主への忠義觀念を中心として構成されたる意識內容を有する各部を縱斷的に歐洲の野に眺め得るも、其處に全歐洲をして統一したる行動たる十字軍の存立を否定するを得ない。之れぞ其の當時の衆個人の各意識內容に於て、其の大部分を占めゐる宗教意識に於て普遍の世界を認め、此の意識は封建國家意識を超越して其處に橫斷的に結合した宗教運動となり、十字軍の現象となつたのである。當時に於ては宗教意識は衆個人の意識內容の大部分を占めゐることゝ、その强烈なることゝ、而かも其宗教意識は唯一神への憬れであり、キリストへの感情の投影なるに於て、而かも此の行動を共にせる十字軍行進の其の過程に於ける其の相互影響より生める社會意識、これぞ即ち當時の世界社會の生めるそれであつたので

ある。換言すれば、中世十字軍當時に於ては、宗教を中心觀念として其處に世界社會の存在を認めることを得るのである。

四

私は之れ迄論じ來ることに於て、世界社會の存在を歴史上に眺め、その國體意識の存在は現存のみならず、歴史上のそれに於ても存在したることを學んだ。

そこで問題は、此の世界社會なる國體と、構成せる社會人の意識との關係如何に歩をすゝめたい。

抑も宗教の世界は人間性の本有であり。(註三)而かも其の歴史は多神教より一神教への推移を認め得る。この意味に於て理想へ置き換へられたが如く見ゆる現代人に於ても多元論より一元論へとすゝむ哲學を眺むる時合理性を要求する現狀に於ける人間の本性に於て、唯一世界への憧れにあることは之を否定し得ない。(註四)換言すれば世界觀の擴大と、人生觀の變化と、社會觀の推移とは、其の結論

に於て、世界社會を人間の本性より要求し來るものである。而かも在るがまゝの現勢に於ては、此の人間本有の要求をして實現せしむべく助成されつゝ社會が流れつゝあるを認むるを得る。それは第一に交通の發達より來る世界の縮少である。世界の縮少は各人の世界觀の擴大となる。第二には各國に起り現れ來れる勞働運動である。詳言すれば第二は(A)左傾主義の國際運動であり、(B)勞働組合の國際運動であり、(C)勞働立法の國際運動である。

五

今之れを意識構成の要素の研究に歩をすゝめながら觀察しよう。其の形式上より見るとき、宗教時代に於ける神は其れ自身に於て普遍性を有してゐる。只世界觀の擴大せざる中世に於ては、歐洲キリスト教人類の結合の世界のみに限定された。而してそは限定されたる世界觀であつた處に缺點を有するもそのために決して宗教獨特の普遍性を害するものではなかつた。宗教時代から現代に移つ

て、宗教に於ける神の拘束力の形式は、社會正義となり人道となりその前提のもとに自由となり平等となつた。その推移は、其の內容のみの世界に屬して、絕對至上の權威を以て衆個人に臨んだことは、宗教時代の神と少しも變つてはゐない。

今之れをかの大戰後のヴェルサイユ平和條約第十三編に見ると——

『國際聯盟ハ世界平和ノ確立ヲ目的トシ、而シテ世界平和ハ社會正義ヲ基礎トスル場合ニ於テノミ確立シ得ヘキモノナルニ因リ一國ニ於テ人道的勞働條件ヲ採用セサルトキハ他ノ諸國ノ之カ改善ヲ企圖スルモノニ對シ障礙ト爲ルヘキニ因リ、

玆ニ締約國ハ正義人道ヲ旨トシ世界恒久平和ヲ確保スルノ冀望ヲ以テ左ノ諸條ヲ協定ス』云々。

としたるは、中世人の神への憧れが、現代人によつて正義となり、人道となりて、表現されたものと云へやう。換言すれば、其の希望に於て、普遍世界への要求である。而かも世界觀の擴大したる現代人の意識に於ては、『世界社會恒久ノ平和ノ確保

スルノ冀望』は所謂世界社會の存在におぼろげながら注意の眼の向けられたことを意味する。

要言すれば、現代人は世界社會より發する團體の社會意識の拘束を認識することによつて、世界恒久の平和を確保し、社會正義の念及び人道に合致する文化的要求の必要且つ大なるものなることを感知するに至つた。

六

以上の如き世界觀の擴大を來したる現代人にとりて、マルクスによつて叫ばれたる近代に於けるインタナショナルの運動（註五）の出現は、縱斷的なる國家意識に强要されたる社會觀に對して階級鬪爭より來る橫斷的結合の强制を要求され來つたことに於て、其の武器たる階級鬪爭を通じて漸次各人の社會觀に大なる變化を與へ、否な個別的なる國家なる團體社會より世界社會なる團體への認識と共の社會觀の推移とを齎らし來つたのである。

かの獨逸社會民主黨の一派が開戰當時『我れは社會主義者なるも獨逸人なり』と宣言して開戰に參與したエピソードの如き、たまたま過渡期の相を物語るものである。換言すれば社會觀の變化を來しつゝあつた彼等とても、幼時に與へられたる感情へ織り込まれたる人格化せる過去の教育の名殘りを多分に有して居たことを物語るのである。之れと同じ意義に於て、歐洲大戰當時の社會主義者の大戰への參與の事情を說明し得るものであつて、そは決して社會觀の變化なきことを反證する事實としては上げらる可きものでない。

インタナショナルの運動は不振に終つたとはいへ、各人の意識の意味づけに於て社會觀の推移を來さしめたことは、之れを無視することを得ないであらう。

七

加るに勞働組合の國際的運動に於て之れを見るに、第一インタナショナルの創立より三十三年もその成立に於て遲れ一八九七年に開かれた勞働組合の國際會

議の決議によつて生れた『勞働者保護の爲めにする國際會議』(International Congress for the Protection of Labourers)に見るとき、國家を超越して勞働者の昂上を圖ることを中心觀念としてゐることが察知される。げに一九〇一年コペンハーゲンに開かれた會議の宣明に於て各國の勞働組合の緊密なる結合を計り、勞働組合の統計を統一し經濟爭鬪に於て相互に援助し且勞働組合組織に直接關係ある一切の問題を討究するを目的とすると述べたるが如く、インタナショナルの如き過激でない丈け、それ丈け實行力を有し、而かも經濟觀點を中心としてゐるのは、資本主義下の今日に於て、其の影響の及ぶところ大であることを認め得られやう。

八

而かも勞働者保護立法の運動は、ロバート・オーキンに其の端を發し、今次の世界大戰後ベルサイユ平和條約に至つて國際的立法と化したのである。卽ち——

『多數ノ人民ニ對スル不正、困苦及窮乏ヲ伴フ現今ノ勞働狀態ハ大ナル不安ヲ

醸シ惹テ世界ノ平和協調ヲ危殆ナラシムヘキニ因リ、彼ノ勞働時間ノ制定殊ニ一日又ハ一週ノ最長勞働時間ノ限定、勞働供給ノ調節失業ノ防止、相應ノ生活ヲ支フルニ足ル賃金ノ制定、勞務傷害及疾病ニ對スル勞働者ノ保護、兒童年少者及婦人ノ保護、老年及癈疾ニ對スル施設、自國外ニ於テ使用セラルル勞働者ノ保護結社自由ノ原則ノ承認、職業及技術教育ノ組織等ノ如キ手段ヲ以テ前記勞働狀態ヲ改善スルコトハ刻下ノ急務ナルニ因リ』云々（ヴェルサイユ平和條約第十三編）

となり、着々とその實行政策に入り居る今日に於て、一の運命的宿命觀に支配されてゐたる彼等各國人の社會觀の推移となり、その懐ける人生觀に大なるショックと變化とを齎し、横斷的普遍への世界に向つて社會は流れつゝあるのである。

（註六）

九

之れを要するに社會の實相及其の流れは各國人の縱斷的世界觀、人生觀、社會觀をして横斷的たらしむると共に、交通の發達は、世界人の移動を容易にし、資本主義は利益を中心とする、觀念よりして大都市を生み、現にパリの如く、世界社會の存在を認るに至つた。而かも此の實相は、世界社會意識への推移を助成する勞働運動と相待つて、世界社會を大ならしむる趨勢にあり、世界社會の大は世界社會意識の擴大となり、世界社會意識の擴大は、強き拘束力を以て他の社會團體に臨むに至ることを察知するを得る。

（註一）拙著『我國資本家階級の發達と資本主義精神』（大正九年）刊二六頁以下參照。
（註二）拙著『社會學徒の描く世界』（大正十四年刊）一三頁以下參照。
（註三）Durkheim, Les formes élémentaires de la vie religieuse, Paris, 1912, P. 65.
（註四）本書『社會政策の基調』參照。
（註五）淺野研眞氏著『インタナショナル發達史』（大大十四年刊）四頁、六六頁、及び八〇——一一二頁參照。
（註六）W, Sauer, Philosophie der Zukunft, Stuttgart, 1923, S. 303.

（『社會學雜誌』第二十二號——一九二五・一二・四）

大正十五年五月二十八日印刷
大正十五年六月一日發行

【現代社會政策奥付】
定價 上製金二圓五十錢
並製金二圓二十錢

著作者 圓谷弘
東京市神田區表猿樂町二十三番地
發行者 百瀬清一
東京市神田區三崎町三ノ六五番地
印刷者 西村由太郎
東京市神田區表神保町十番地
印刷所 同興舍

東京市神田區
表猿樂町廿三番地
發行所 文精社
振替東京七二八三三番

著作權所有

文精社發行書

日大教授兼學監 圓谷弘著
現代社會政策
定價 上製二圓五十錢 並製二圓二十錢

日大教授 山下博章著
物權法論（分冊第一）
定價 一圓五十錢

同 同氏著
物權法論（續刊）
近刊

同 同氏著
法律學概論
近刊

同 同氏著
擔保物權法（講義案）
近刊

終